

2017年度 韓国社会福祉学会春季学術大会報告

韓国社会福祉学会春季学術大会での自由研究発表について（報告）

瀧川 賢司

日本福祉大学 大学院 福祉社会開発研究科

ソウルから約1時間のフライトの後、学会開催の地である全羅南道の麗水（ヨス）に初めて降り立った。韓国を訪れるたびに刺激的な喧騒を感じるが多かったが、リアス式海岸を擁するこの港町には、まるで日本にいるかの如くなぜか逆にホッとさせてくれる雰囲気があった。

私の発表テーマは、犯罪を起こした知的障がい者の犯罪行動傾向と生活との関連性について、インタビューを通して明らかにするという内容である。研究の特徴は、ライフ・ライン・メソッドを用いることで、質的分析のみならず、ライフ・ラインというグラフの形状から量的分析も加えた点である。今回、福祉分野ではまだポピュラーではないこの手法や結果に対し、海外の研究者からどのような評価を頂けるのかを確かめるため、不安と期待が入り混じった気持ちを抱きつつ韓国での発表を決断した。

発表準備では、事前に提出する10ページにわたる要約論文を何度も推敲しながら執筆した。また以前、勉強していた韓国語を活かすチャンスでもあり、発表の前半（研究の背景まで）は韓国語で、後半のデータの説明と考察は丁寧に説明するために、通訳者を介して発表することとした。そのため、韓国語の発表原稿や発音は、韓国人の留学生の方にチェックしてもらい、発表直前まで何度も練習した。

発表当日、セッション会場の空気は張りつめていたが、何とか無事に韓国語でのスピーキングを終えることができた。その後、講評者である韓神大学のホン教授からは、知的障がい者の心理的・情緒的な日常生活の変化について細かくモニターができた点について、このような研究ができて羨ましいとのコメントを頂き、幸運にも研究の手法や結果に対して一定の評価を頂けた。また研究の足りない点として、質的分析におけるカテゴリーの内容を再度、分類する必要性を指摘して頂くなど、予定の倍以上の時間をかけて、熱い口調で丁寧な助言を頂き、非常に有意義な講評を得ることができた。やはり、ここは韓国である。ホッとするだけでなく、刺激的な経験を最後に与えてくれた。

今回の発表を通して、海外において自分の研究に対する評価を確認することの重要性を感じた。そして、再びあの刺激的な場に立つため、今後の研究へ向けた強いモチベーションが、今また湧き上がっている。